

児童健全育成賞 優秀賞

異なる役割を持つふたつの児童館での実践を通して —大型児童館と小型児童館の違いとそれぞれの役割—

愛知県東郷町

東郷町立兵庫児童館 館長 高 阪 麻 子

1. はじめに

現在全国には約4,300館の児童館があり、広域を対象とした県立の大型児童館（以下、「大型館」とする）は18館である。私は愛知県の大型館で立ち上げから18年間従事した後、地域の小型児童館（以下、「小型館」とする）に勤め、ふたつの児童館を経験している。『児童館の設置運営要綱』では建物や対象の広さの違いが記され、大型館の機能は小型館等の機能に加えて「都道府県内の小型児童館、児童センター及びその他の児童館の指導及び連絡調整等の役割を果たす中枢的機能を有するもの」としている。私は言葉通りに同じ児童館として捉え、機能が少し拡張されたものと認識していた。そのため小型館へ転職する時も不安はなく、これまでの経験を大いに活かせると信じ、前向きな気持ちで新しい現場を迎えた。しかしながらそれは着任早々から不安へと変わり、大型館での18年間の経験で得た自信は脆くも崩れた。

大型館では毎日何百人、週末には何千人に遊びのプログラムを展開し、出会った子どもが仲良くなり笑顔で帰っていく経験を提供してきた。しかしながら小型館では隣にいる数人の子どもが私の話を聞いてくれないのである。大型館では人気だった遊びを「つまらない」と目の前で言う子どもの姿にとまどいと不安しか感じられなかった。大型館と小型館を利用する子どもは何が違うのか、何が足りないのかと葛藤した。そこで私はふたつの児童館の機能や役割に

着目し、ふたつの児童館の存在意義と児童厚生員の在り方を考えていくこととなった。

平成30年に児童館ガイドラインが改正され、「大型児童館の機能・役割」が新たに章立てされた。「固有の施設特性を有し、子どもの健全育成の象徴的な拠点施設」とあり、私の実践は大型館の施設特性に基づいた特有の考え方やプログラムであること、「県内児童館の連絡調整・支援」「広域的・専門的健全育成活動の展開」など小型館とは違う役割であることが記されている。

今回は私の大型館と小型館の実践からふたつの児童館の違いや役割、改めて感じたその必要性を報告する。

2. 大型児童館での実践～愛知県児童総合センターの活動～

(1) プレイ事業（集団遊び事業）

愛知県児童総合センターは平成8年に創設され、県内約270の小型館や児童センターの中枢的役割である。A型に分類され、その特色を遊びのプログラム開発とし、造形・表現活動を得意としている。私はその立ち上げから関わり、プレイ事業を担当した。新しい体験をテーマに新しい切り口で大勢の子どもにプログラムを提供してきた。来館者は県全体や近隣県まで及び、生活圏から離れた場所にあるため子どもだけで来館することは難しくほとんどが家族での来館である。

プレイ事業で私が力を注いだのは三つ。一つ目は大勢の人に伝わる進行をすること。大型館では一度の参加者数が100人を超えることもあり、全員が楽しさと参加感を得られる進行が必要である。言葉を選び抑揚を加え、冗談を交えて話す技術は経験と学びが必要であった。バラエティ番組やイベントの司会者を見て学び、表情や身振り手振りで進行していくのである。大変ではあったが、大勢の参加者が楽しんでる姿は大きな喜びであった。二つ目は大人を巻き込んでいくこと。児童館の対象は子どもである。児童館ガイドラインでは0歳から18歳未満のすべての子どもを対象としているが、家族で来館する大型館では子どもよりも大人の人数が多く、その大人たちが傍観者になることで遊びの雰囲気や妨げてしまうこともある。そこで私は大人も一緒に参加することを前提に企画し、大人も楽しめるように仕組みを考えた。子どもと対戦し、思わず大人が真剣になってしまう場面を作った。ある時、子どもと一緒に参加したお父さんを見て、お母さんが「あんなに楽しそうな夫を久しぶりに見ました」と笑って教えてくれた。大人の楽しそうな姿は子どもや見ている人に楽しさを与えてくれるのだと、大人を巻き込んだ遊びの重要性を確信した。「大人が楽しいと子どもは嬉しい」という言葉を今も私の活動のモットーとしている。三つ目は、初めて出会った子どもたちが仲間感を作ること。大型館では知らない子ども同士がチームになるため、出会ってすぐに仲間感を得られなければならないのだ。私自身も実践していくうちに理解できた事は「遊びは媒体」なのである。遊びを通してコミュニケーションを図り、仲間感を育み、最後は手を取って喜び合う。緊張していた子どもたちは、みんなで宝を探す、他のチームより早くゴールするという具体的な目標に向かって仲間になっていくのである。ある日、兄妹で参加をした家族が「妹は恥ずかしがり屋なので、兄と同じチームにしてほしい」と申し出た。今思えばその保護者の心配も理解し丁寧に説明する必要があったと反省するが、若かりし

頃の私は自信満々に「大丈夫。遊びは子どもたちの心と緊張をほぐしてくれますよ」と申し出を断り、兄妹を別々のチームにした。結果、見事に妹は見知らぬ子たちと仲良くなり協力し、兄のチームを抑えて優勝をしたのだ。そして妹の「また参加したい！」と言う姿を見て、保護者が嬉しそうに「ありがとうございました」と帰っていったのである。遊びの力は素晴らしく初対面でも仲間になることができると感じ、私は遊びの魅力を再認識した。

(2) 子育て支援事業

次に担当したのは子育て支援事業である。子育て広場や情報誌作成、相談事業などを行った。「あのねっとクラブ」は親子の遊びと保護者のおしゃべりの時間、家族の参加回などで構成された盛りだくさんの子育て広場である。母親の参加が多かったが、育休中の父親や祖父母も参加し、家族みんなで子育てを楽しめる事業であった。毎度、最終回は保護者の「過去の自分」の写真を持ち寄り話し合った。学生時代や仕事をしていた頃、結婚式の写真など自分の時間を楽しんでいた頃の写真が多く、そこには懐かしさや「過去」の自分への羨ましさを感じられた。「今」の子ども中心で自由のない生活に少しだけ弱音を吐きながらも、子どもが寝た後の10分間のティータイムを楽しむという前向きな気持ちや数年後に家族で海外旅行に行きたいという楽しい「未来」を掲げ、「今」を楽しむ気持ちを取り戻していった。事業開始当初はイクメンが流行しておらず、家族の回は子どもたちの大泣きから始まり、泣き止まないわが子と格闘する父親の様子が見られた。しかし10年も経つと父親の子育てが当たり前となり「パパがいい」という子どもに母親が苦笑いするような場面も見られ、時代の変化を目の当たりにした。

子育て相談事業では、歩かない・発語をしない不安や、発達障害疑いの子どもの発達についての相談が多かった。話を聞くことが私の役割であるが「いつも楽しそうに遊ぶね、ママのことが大好きなのがよくわかるよ」などその子

の良いところを伝えるようにした。その言葉だけでは直接解決にはならないが少なくともその瞬間の相談者のほっとした顔を見ることが出来る。他にも近所付き合いの不安や、配偶者・姑との関係性など深い話になり、泣きながら辛さを訴えることもあった。しかしながら大型館の児童厚生員と相談者は初対面であることも多い。相談者の家族構成や普段の様子はもちろん、名前さえ知らないまま話を聞くこともある。それでも相談者たちは深い思いや辛さ、本音をぶちまけて感情をあらわにする。その心理は「その関係性だからこそ」である。自分のことを詳しく知らない相手、二度と会わないかもしれない相手というのが、ここでの相談事業の特徴である。だからこそ本音が言えたり、近い人には言えない秘めた思いを吐き出したりすることができるのである。私は相談事業の重要性を改めて感じた。大人が笑い、泣ける場所、それが児童館なのだとその存在の希少性と重要性に、児童厚生員という仕事に誇りを感じた。

(3) 大型児童館ならではの事業

大型館の対象は広域であり、啓発事業も役割のひとつである。話題性のある事業や情報発信は、来館できない何万人もの対象者に遊びや子育ての大切さを感じてもらえることができる。ニーズやトレンドに敏感にアンテナを張り、常に発信を意識しながら事業を行ってきた。

「イクメン応援キャラバン隊」は父親の育児支援を目的に県内の小型館に出向き、父子プログラムを展開した。母親の代わりではなく父親が父親らしく子どもと関わる子育てを推進した。「魚をさばく！」は父子で1匹のアジを捌き、七輪で焼いて食べるプログラムである。子どもに応援されながらお父さんが奮闘し、最後は家族と一緒に食べるこの事業は家族がまるごと笑顔になるプログラムだった。少し焦げてしまっても「おいしかった」とみんなが笑顔で帰っていった。「おうちでもやってもらおう」と多くのお母さんが口にするのも微笑ましかった。

「紙コップランド」は紙コップを積み木のよ

うにして遊ぶプログラム。日用品を遊び道具にしてお父さんの子ども心に火をつける進行がポイントである。高く積むことにこだわり、崩れても諦めず積み続けるお父さんの姿は、子どもにとってどれほど楽しいことかを知ることができた。またこのプログラムでは「大人気ない」は誉め言葉である。

これらのプログラムは父親が子育てを楽しむという目的を広く支援者にも伝えることができ、小型館でもプログラムが実施された。その際、小型館の職員の「お父さんが児童館に入りやすい看板があるといい」という意見を取り入れて『ようこそお父さんステッカー』を作成し県内全児童館に配布した。児童館の玄関に貼り、お父さんを歓迎する雰囲気を作った。歓迎ムードがありすぎても気後れするという意見もあり、ステッカーは彩度を落としたさりげないデザインになるよう工夫もした。県内全体で父親の育児支援に取り組めたことは、大型館と小型館が一緒になって意識を高める良い機会となった。

このように新しい体験や非日常的活動を意識してプログラムを実施してきた。テーマパークでの体験とは質は異なるが、親子での忘れられない特別な体験を提供できていたと思っている。そしてその体験は大型館ゆえに毎月何万人という多くの人たちに提供することができていた。これらが私の大型館での実践である。

(4) 専門組織やアーティストとの連携

大型館では様々な専門家や組織と連携をしてきた。大学の研究室や他県の大館との情報交換は視野や知識を広げる機会であったし、アーティストとの連携は私自身も良い刺激を受けた。日用品で音楽を奏でる音楽家はお茶碗を使ってトルコ行進曲を演奏し、オノマトペを研究する専門家は児童館の中でたくさんの音を見つけて遊んだ。絵本作家や竹細作家、人形劇団に料理家などこれらの世界観は子どもたちに大きな感動を与え、遊びを豊かにした。普段交えることのない専門家との出会いを提供し、そ

の感動と世界観をもって情操を豊かにしていくことも大型館ができる特別な役割のひとつであった。

3. 小型児童館での実践～東郷町立兵庫児童館での活動～

(1) 小型児童館への期待と実際

5年前、私は小型館に着任した。大型館での18年間の経験をどのように活かせるかという期待を込めて活動を開始した。東郷町は愛知県の大きな街に挟まれた小さな町である。地域は新しい住宅街であり、平成19年に小学校と隣接する形で放課後児童クラブ機能を持つ児童館が建設された。平屋建てで中庭とウッドデッキのある素敵な作りである。しかしながら大型館から来た私には端から端まで見渡せ、声が届くこの児童館はとても狭い空間に思えた。大型館では毎週末に迷子が続出し、泣く子どもを抱っこして保護者を捜し歩いた私は「ここでは迷子はない」と笑った。その小さな児童館で待っていたのは大きな心の触れ合いだった。

とても純朴な子どもたちは、すぐに私を受け入れてくれた。「新しい館長が来た」とそばに寄り話しかけ、学校での話や好きな遊びを教えてくれた。そのうちに腕や脚をつかまえては離さず、勢いよく背中に跳び乗るようになった。脱いだシューズは隠され、行く手を遮られる。「小型館あるある」であるが、大型館から来たばかりの私はそんな子どもたちに翻弄されていた。大型館では来館者との距離を大切にしており適度な距離感が良い関係を生むと思っていた私は、兵庫児童館の子どもたちと距離を取りたいと思ったが、それを許してくれないのである。だんだんと話は聞いてくれなくなり、腕や脚を引っ張る力は強くなり、叩かれ蹴られるようになった。その時、私は大型館では子どもを叱ったり注意したりすることがほとんどなかったことに気づく。大型館の児童厚生員は施設管理のスタッフや遊びのお姉さんとして認識され、個人名で呼ばれることはあまりない。そして保護者が子どもの行き過ぎた行動を注意してくれる

ため、笑顔で「やめようね」と言えば理解されたのだった。しかしながらここでは「やめようね」と言えば「やだ」と返され、辞める子どもは一人もいなかった。強く言えばせつかく受け入れてくれた子どもたちに嫌われるかもしれないという不安があり、まるで初任者のようだった。そこから私は小型館での子どもとの距離感と児童厚生員の在り方について考えるようになった。

私には大型館で蓄えてきた遊びのレポーターがたくさんあり子どもたちを喜ばせることができると思っていた。しかしながら子どもたちは私の声掛けには反応せず「つまらない」と面と向かって言い、いつもの遊びに戻って行った。何度も挑戦してみたが反応は悪く、誰も「またやってみたい」とは言わなかった。遊び＝プログラムだと思っていた私は自分本位にプログラムを提供し、子どもたちは求めてもいないことをやらされる状態だったのだ。児童厚生員の仲間たちに相談すると「小型児童館だからね」という答えが返ってきた。それを理解するためには小型館での経験を積むしかなかった。

(2) 子どもたちとの関わりと距離感

兵庫児童館の子どもたちはよく「人懐っこい」と言われる。子どもらしさとかわいらしさがあり、子どもたちを観察していると欲求や感情表現の原点のようなものが見えてきた。小型館に慣れてきた時に感じたのは、ここで必要なのは遊びのプログラムではなく人と人との関わりということだった。そこで私がすぐに実行したのは全員の名前を憶え、名前を呼ぶことだった。自由来館児童、児童クラブ登録児童、そしてその保護者たちを合わせ、私はいきなり数百人の名前を覚えることを自分に課した。今では当たり前なことだと感じるが大型館では来館者の名前を呼ぶことはほとんどなかったのだ。「お子さん」「みなさん」という総称で関係を完結できるからだ。子どもたちを名前と呼ぶと、私も愛情を込めて「かんちょう」と呼ばれた。ただし「かんちょう」が「館長」だと思っている子

どもは少ない。「はんちょう！」と呼ばれたり「かんちょうっていい名前だね」と言われたりする。そして私はまた愛情を込めて名前呼び返す。子どもが親からもらった最初のプレゼントだという話を思い出し、大切に名前を呼ぶことにした。その効果は絶大で、子どもや保護者との距離は一気に近くなった。大型館において意図的に取っていた来館者との距離感と、関係性が濃密な小型館での近い距離感が、私が実感した大型館と小型館の特長である。

日々の忙しさの中で子どもの誘いを断ることも少なくない。しかし私はその場合「ちょっと待って」を使わないことを心得としている。「〇分待って」「破れた本を直してからね」と具体的な理由や目安時間を伝える。すると待っている子もいれば、他の職員と遊ぼうと行ってしまう子もいる。大型館では遊びのプログラム進行が子どもとの接点であり、自分の作業の合間を縫って子どもと関わることはなかった。小型館の子どもたちにとって重要なのはそんなふうについて話聞いてくれる職員の存在なのである。今では話を聞いて欲しいような顔や言葉はすぐに分かるが、小型館に来たばかりの頃はそれが分からず、次から次へと話しかけ、どうしたいの？私はいこうだと思おうよ、と発信ばかりしていた。大型館では話しかけることが来館者との関係性を作る重要な手段だったためその感覚が抜けず、黙って頷いて子どもの話を聴けるようになるまでには時間を要した。子どもたちをずっと観ていると、何をしたいのか、なぜ機嫌が悪いのか分かるようになってきた。そして子どもが困っている時でさえ、そばにいて何かを訴えるのを待つことが大切な場合があると分かってきた。観る・聴く・待つは児童厚生員等基礎研修で学んだ事であり、児童厚生員にとっては初歩中の初歩である。経験20年近くにしてようやく理論と実践が一致してきた。今では子どもたちと廊下に座っておしゃべりをし、遊ぼうと言われたら何して遊ぶ？と応え、悲しい顔をしていたら黙って隣に居る。子どもとの距離は物理的にも精神的にも近いが、踏み込まず

そっと居て助けを求められたら必要な支援をする、それが小型館の職員としての重要な素養だと理解を深めた。そして私は小型館が楽しくなってきた。

(3) 小型児童館の子育て支援

「館長より私の方がこの児童館では先輩だからねえ」と子育て広場に参加するママが言った言葉が忘れられず、今でも大切にしている。私は利用者と支援者の関係は、子育てに悩んでいるママを助けてあげるものだと思っていた。大型館ではたくさんママたちの笑顔を生み、支えてきた。しかしここに来た途端、そのママたちから新米扱いされ地域のことをいろいろ教えてもらい、困っている時は当たり前のように手伝ってくれた。「ちょっとうちの子見て、館長を手伝ってくるわ」なんてこともある。ここはみんなで作られている場所であり、利用者も支援者も時には対等になる場所だった。小型館が地域の一員だと言われる理由が理解できた。これをきっかけに私はますます小型館が好きになっていく。

しばらく経つと子育て相談も持ちかけられるようになった。それは大型館の時とは違い、いつも元気なママが落ち込み、イライラしていると一大事だと思うようになった。ママの名前を呼び、話を聞く、その関係性の中で私は安易に「大丈夫だよ」と言えなくなった。一緒になって涙を流し、専門機関を紹介する。病院に行ったらその後の経過を心配し、元気になったら一緒に笑う。そんなふうで過ごしているとあるママが「館長が来てからこの雰囲気が変わったね、児童館が明るくなった」と言ってくれた。この言葉も私の宝物になっている。

(4) 地域との関わりと連携

地域とのつながりや連携は児童館の重要な役割の一つである。兵庫児童館は小学校に隣接し、目の前に公園とコミュニティセンター、その隣にこども園と子育て支援センターがあり、子どもに関わる施設が集まるエリアにある。日々の

挨拶はもちろん、それぞれの施設の行事について話し、気軽に行き来し相談し合える関係がある。ご近所の方からは公園で遊ぶ子どもの情報やたくさんのお菓子のドングリ、落とし物などいろいろなものが届く。迷子の小さな子どもが連れて来られることもあり「子どものことは児童館へ」と思っていたら、「館長！」と声をかけてもらえるありがたい関係性は一朝一夕ではなく、着任から5年間、つながりを築いてきた成果である。「一緒におもしろい事をやろうよ」と言ってもらえる今の関係性は、子どもたちがこの地域で育っていくための土台であり、今後も良い関係性を築いていくことが私の役割のひとつである。

4. 大型児童館と小型児童館の違いと役割

(1) 同じ目的と異なる役割

大型館での経験で培った考え方や距離感、大切だと思ってきたことは小型館には当てはまらず、これまでの経験は無駄だったのかと考えた時があった。その時、私と同じように大型館から小型館に異動した先輩に「5年後にはその経験が活かされる」とアドバイスをいただいた。そのおかげで5年間は小型館の経験を積むだけでなく、ふたつの児童館の違いやその役割、存在意義について考える時間になった。その結果、規模も関わり方も距離感もすべて違うふたつの児童館は、やはり「同じ児童館」なのだという結論に至る。

大型館には遊びのプログラムと新しい体験、非日常の楽しさがあり、小型館にはいつもの遊びといつもの仲間、日常の楽しさがある。大型館には程よい距離感で本音や弱音を吐ける児童厚生員がいて、小型館には一緒に泣いてくれる児童厚生員がいる。大型館では一生の思い出に残るような体験ができ、小型館では一生の友達や仲間だと思える大人と出会うことができる。ふたつの児童館は得るものや体験の質は大きく異なる。しかしながらどちらも子どもの育ちには大切な経験であり、必要な場所である。そし

てこのふたつの児童館が存在することの大きな意義は、利用者が自ら選んで、必要な場所や支援を求めることができることである。大切な事は子どもも大人も自ら選択できるということ、そして児童館はいつでも誰でも同じように受け入れられるように、それぞれの機能を十分に生かして最高の支援ができるようにして待つことが重要な役割である。

私は小型館で活動しながら、大型との「違い」を探し続けてきた。そして先輩が言った5年が経ち、だんだんと「同じ」が見えてきたのである。児童館の役割は、全ての利用者には差別なく支援や遊びを提供すること、出会った子どもたちや保護者に少しでもホッとできるような環境を作ること、また来たいまたやりたいと言ってもらえる遊びや場所を提供することである。その遊びが新しい発想の遊びのプログラムであるか、いつもの遊びであるかは、それぞれの特色なのである。子どもたちにどうなってほしいのかを考え必要な支援を提供していくことが4,300の児童館が目指すべき「同じ」ゴールであると考えている。

(2) 児童館ネットワーク構築とそれぞれの役割

改正児童館ガイドラインには、大型児童館の機能・役割として、県内児童館の指導及び連絡調整等の役割を果たす中枢的機能があると明記され「県内児童館の情報を把握し、相互に利用できるようにすること。さらに、県内児童館相互の連絡、連携を密にし、児童館活動の機能性を向上し充実を図ること」とある。愛知県内300館近い小型の児童館が連携することは難しく、大型館の中枢機能としてできることはもっとあると感じていた。その機能を意識しながら地域の児童館に向くと、子どもから絶大の信頼を得ている人やリーダーシップのある人など高いスキルで活躍する児童厚生員たちに出会った。大型館のサポートが必要だと思っていたが、小型館には私が学ぶことがたくさんあった。そして愛知県内の児童館のことをどれだけ知っているのか、知ろうとしていたのかと反省した。

私は愛知県内の児童館を作り上げている人たちともっと出会ってみたいとなった。それが「元気スイッチ on!! あつまれ! あいちのじどうかん」(以下、「元気スイッチ on!!」という)の始まりである。

平成21年、初めて県内の児童館が一堂に会す元気スイッチ on!! を立ち上げた。実行委員形式で課題を話し合いながら作り上げていく児童厚生員による児童厚生員のための研究大会である。私は主催者の事務局として大会のコーディネートをし、小型館との直接的なつながりと信頼関係を作ることに注力した。また県内児童館全体のスキルアップを目標に掲げ、実行委員や参加者を呼びかけることからスタートした。当初、県内の児童厚生員たちの反応は薄く、行政からは地方分散の時代に中央に集まる必要性を感じないと手厳しい言葉もいただいた。それでも児童館が情報を得ることの有用性とネットワークの必要性を訴えた。元気スイッチを on にする、というこのタイトルは最初に集まった実行委員たちで決めたものだ。まずは集まって顔の見える関係を作る、そして自分たち自身が元気になることが、良い支援を生むという考えである。皆が初めての経験で難航したが、私も実行委員と共にその苦労や喜びを分かち合った。この苦労こそが実行委員同士のつながりを深め、児童館のネットワーク構築を進めていった。その時、私も小型館の児童厚生員も同じ気持ちで、同じ目標に向かっていくことが嬉しく、対等な関係は重要なつながりだと感じた。

その後、県内でも児童館にはそれぞれ特色があり考え方や手法が違っていること、市町村によって運営や組織に大きな違いがあることなどが分かってきた。問題を一つずつクリアしながら、現在は愛知県児童館連絡協議会も主催者となり県内の児童館全体の調整の機能も持ち合わせ、元気スイッチ on!! は第13回まで続けられている。今、私は参加者であり、自己研鑽、出会いや再会を楽しむ場になっている。参加者になって分かったのは参加者の主体的な思いが大会を作り上げているということである。実行委

員として参画をしたり、遊びの情報交換をしたり参加の目的は多様であるが、児童厚生員がこの場所どう活用するかが重要であり、熱意ある参加者たちによって大会の継続が支えられているのである。大型館が仕組みを作り学びとつながりを提供してきたこの研究大会は小型館の主体的な参加に支えられている。ここから派生したつながりは大型館と小型館という縦のつながりから、小型館と小型館の横のつながりへと発展している。実行委員が考えたこの大会のネーミングは合言葉になっており、その元気と熱意で愛知県の児童館はつながっている。

(3) 補い合える児童館と児童館

ふたつの児童館は補い合うことができる。大型館はトレンドの先端を行き、遊びのプログラム開発を続ける。来館者のニーズを把握し、新しい支援の形や必要性を探り続けていく。小型館に情報を提供し、学びとつながりの場を作る役割を担う。小型館は利用者との近い距離感を活かして、目の前の子どもや子育て家庭の声を聴き、社会に発信していく。さらに現場の葛藤や学びの必要性を訴え、大型館の提供する場を主体的に活用する。情報を発信し、意見を述べ合うことでお互いの役割を活かすことができる。県内のたくさんの小型館、児童センターが、大型館に共同し補い合える関係を保っていくことが大切である。

5. おわりに

23年間で私が得たものはそれぞれの視点とその環境に合わせた対応力、ふたつの児童館の利点や関係の重要性への気づきである。これは今後、福祉的課題や多様性の対応を求められる児童館にとって必要なスキルだと考えるが、私にはまだ「できる」ことがある。ふたつの児童館を経験した者として、児童館の補い合える関係性を強化していくための橋渡しとなることだ。大型館の可能性と有効性を小型館の立場から広く伝え活用し最大限に活かすこと。そして大型館の役割だと思っていたネットワーク構築

は、小型館が発信し大型館がサポートする関係も有りだと考え、それを実現させること。そのために私自身もネットワークを広げ成長することが、私の今後の課題である。

大型児童館と小型児童館は目的を同じとする健全育成の場であるが、視点や手法は異なる。100人に伝わるように身振り手振りで話したり、目の前のひとりに向けて目をじっと見て静かに話したりする。これはふたつを経験したからこそ実感する大きな違いである。そしてこれはどちらが正解だとか大切だとかではなく、どちらも大切で必要な支援であると、実践してたどり着いたやり方である。全体を見渡すマクロな視点と毎日を見逃さないミクロな視点で、今の私は誰一人取りこぼさない支援を行う新たな使命を得た。小型館として大型館の発信する情報や場を大いに活用し、大型館のサポートとなり得るように主体的に関わっていきたい。またこのスタンスが多く的小型館にとっての良いモデルとなるよう、発信のできる小さな児童館となることを目指していきたい。